

デビュー曲を対象とした音楽的特性の解析

石井 雅規

本研究の目的は、歌謡曲の歌唱部分の音符に注目し、人気を得た楽曲の共通点や相違点を解析することである。なお、ここでの人気を得た楽曲とは、アーティストの知名度やマーケティングなどではなく、楽曲のみの特徴によってCDシングルの売り上げを獲得できた楽曲である。アーティストのデビュー時点であれば知名度は低く、楽曲以外の人気を得る要因を可能な限り抑えることができる。1991年から2013年までの週間オリコンチャート上位20位にランクインしたデビュー曲に注目し、人気を得た楽曲の特徴を捉える。

本研究は、歌詞の構成要素である発音単位に付与されている音価に注目する。歌詞の構成要素として、日本語にはモーラ、英語には音節を用いる。それぞれの楽曲に関して、音価の使用頻度を示す音価の割合、発音単位の音価1つあたりの絶対時間を算出した音価ごとの継続時間の2つの側面から分析を行う。4分音符1つが1/4の音価1つに当たる。1991年から2013年までを10個のグループに分割し、年代ごとに解析を行い、上位曲と下位曲に見られる音価の特徴の異なる点や、上位曲の年代ごとの変化などを明らかにする。

音価の割合に関して、1/4、1/8、1/16の音価が全ての年代の上位曲と下位曲に共通して多く使用されており、1/8の音価が40%から70%使用されていた。次いで1/16、1/4の音価という結果となり、2002年までは、上位曲と下位曲の1/16、1/4の音価の割合に10%から30%の差がある。上位曲には1/8、1/16の音価の割合が合わせて80%であったことに対し、下位曲では1/8、1/4の音価の割合が合わせて80%であった。1/8の音価の割合では、1999-2000年と2001-2002年の年代において上位曲と下位曲で差(有意水準5%)があり、1/16の音価についても、1999-2000年と2001-2002年において上位曲と下位曲に差(有意水準5%)がある。しかし、2003年以降は上位曲と下位曲の音価の割合に差はなかった。また、楽曲のテンポを示すBPM(Beat Per Minute)や音価ごとの継続時間については、上位曲の方が下位曲と比較してBPMの値は20から40小さいが、近年の楽曲程差は減少していた。年代ごとの継続時間には大きな差はないが、2009-2010年のみ上位曲と下位曲の1/8の音価の継続時間に差(有意水準1%)があった。それぞれ相関係数を調べたところ、音価の割合には相関のバラツキはあったが、音価の継続時間の相関係数は0.9以上を示しており相関は高かった。楽曲の製作者は近年に近づくにつれ多様性を表現しているが、楽曲の受け取り側は多様な楽曲を求めているとは言えず、楽曲の製作者側と受け取り側に差が生じている。

今後人気を得やすい楽曲の特徴としては、音価の多様性はあるが1/8の音価が60%以上使用されており、楽曲を聴いた印象としてはこれまでの楽曲とは変化が少ないものが好まれる可能性がある。本研究の結果から、今後人気を得る可能性のある楽曲の推奨や、楽曲が人気を得るための1つの要因として参考にできると考えられる。

(指導教員 真栄城哲也)